

漢字の読み方に関する調査研究 (1)

相 原 林 司

1. 初 め に

この研究は、昭和 52 年度文部省科学研究費による特定研究「国語教育効率化のための漢字の記号特性の研究」(代表者 林四郎)の一環として行なったものである。

近年、外来語の活発な流行に伴って、漢字の造語力が低下したこと、漢字が意字としての特性を失って音符化する傾向が著しいことなどが指摘されている。その一方、教育の現場においては、学生・生徒の無造作な誤字宛字が増加して教師を悩ませている。その誤字宛字は、同音異字または類音異字であることが多い。そのような状況のもとで、現代の児童・生徒ないし学生は、個々の漢字をどの程度正確に理解しているのか、特に漢字の意味をどのくらい把握しているのか、それを漢字の読みの方から説明してみたい、というのが、この調査研究の主要な動機であった。日本語における漢字の機能を考えると、主として音読みがその音符としての面を、訓読みがその意符としての面をそれぞれになっていると考えられる。従って、もし、訓読みが音読みに比べて十分充実しているならば、意字としての漢字の機能はそんなに衰えていないと考えてよいであろうし、逆に、訓読みが著しく劣っているならば、漢字の音符化はかなり進んでいると判断されるからである。

以上のような動機のもとに行なったこの調査研究は、その具体的な目標を次の 4 つの点を明らかにすることに置いた。

- 1) 学習経験や生活体験が増大するのに伴って、漢字の読み方は、どれだけ多様化し、どのように変化するか。
- 2) 当用漢字音訓表の音訓の読みは、各学習段階、各年齢段階において、どの程度充足されているか。
- 3) 漢字の音と訓とで、読みの充足状況にどのような違いがあるか。
- 4) 当用漢字音訓表以外の音訓が、各年齢段階で、どの程度表れるか。

次に、調査の方法は、次のようにした。

- 1) 当用漢字の中から、比較的多様な読みをもつもの 80 字を選び、それを被験者に示して、それぞれの字の読みを知っているだけ(ただし、紙面のつごうで 1 字について 5 つを限度とする)記入してもらった。
- 2) 記入するに当って、熟字訓は除外し、また、品詞による語形の違いや連濁による読みの違いなどは無視することとした。
- 3) 調査用紙を、小学生・中学生を対象にするもの (I) と、高校生以上を対象とするもの (II) との二種に分け、80 字のうち 50 字は I と II に共通とし、30 字は I と II とで字種を変えた。主として、小学生に過重な負担や心理的な圧迫を与えないためである。

方法としては、あらかじめいくつかの読みを提示して選ばせる再認法や、また、同じ再現法を用いるにしても、熟語の形にしたり、送り仮名を添えて一語の形で提示したりすることも考えたが、暗示や予測を被験者に与える恐れがあるので、それらの方法を避け、自由に記入する方法を採用したのである。

調査の対象は、小学校五年・六年の児童、中学校一年・三年の生徒、高等学校一年・三年の生徒、大学二年の学生、及び成人で、総計約 1300 名である。また、調査の年月は、中学一年の一部を除いて、他はすべて昭和 52 年 11 月～12 月であった。

以上のようにして調査した、延べ 110 字の漢字の中から、小・中学生のみを対象としたもののうち 10 字(かりに初期学習文字と称する)、全被験者を対象としたもののうち 20 字(同じく中期学習文字と称する)、高校生以上を対象としたもののうち 10 字、計 40 字をほとんど無作為に選びだし、それぞれの漢字について、個々の読みを学年・年齢の段階ごとに集計したものを数字と百分率とで〈表〉に表わした。〈表〉の中で、上段の数字が実数、下段の()の中が百分率である。初期学習文字の「間」の場合でいうと、小学校五年生 154 人のうち、127 人がこの文字に〈かん〉という読みを記入しており、それは、五年生全体の 82 パーセントにあたる、ということである。また、個々の被験者がそれぞれの漢字をどのように読んでいるか、という読みの型による分類集計も試みて、その結果を百分率のグラフで示した。同じく「間」を例にとると、小学校五年生の 20 パーセントぐらゐは、この漢字を〈かん・あいだ〉と読んでおり、六年生でこの字を〈かん・あいだ・ま〉と読んでいる者は全体の約 70 パーセントに達する、ということである。このグラフによって、学年や年齢が進むにつれ、漢字の読みが次第に多様化していく状況が見られるであ

ろう。

また、今回の調査で興味深かったのは、おのおのの漢字について、標準的、常識的な読み以外に被験者が記入している、変った読み方である。これらの中には、何らかの誤解にもとづいて被験者が記入した、いわゆる誤読もあるうし、また中には、こう読んだらどうかという提案やジョークの意味のものもあるかもしれない。いずれにしても、それらの中にその漢字に対する被験者の受けとめ方のようなものがうかがわれそうである。そう考えて、それらを仮に「異読」と名づけ、そのおもなものを採録し、そのような読みが生れる原因や背景について考察を加えた。ただし、これは私の個人的な推測によるものが大部分であるので、中には誤解もあるかもしれない。

次に、〈表〉及びグラフについて、若干の注釈を加えておく。

〈表〉の題字の下に数字は、教育数字の配当学年を示す。同じく*印は、繰り上げ学習可とされている文字であることを示す。

〈表〉の読みの中で*印を付けたものは、当用漢字音訓表に載せられていない読みであることを示す。

中期学習文字のグラフにおいて、①の数字は、その図が小学生・中学生を対象とするものであることを、同じく②の数字は、それが高校生・大学生・成人向けのものであることを示す。

グラフの四種の線は、それぞれ次の学年を示す。

①の場合 小学校五年———、小学校六年-----、中学一年———、
中学三年……………

②の場合 高校一年———、高校三年-----、大学生———、成人
……………

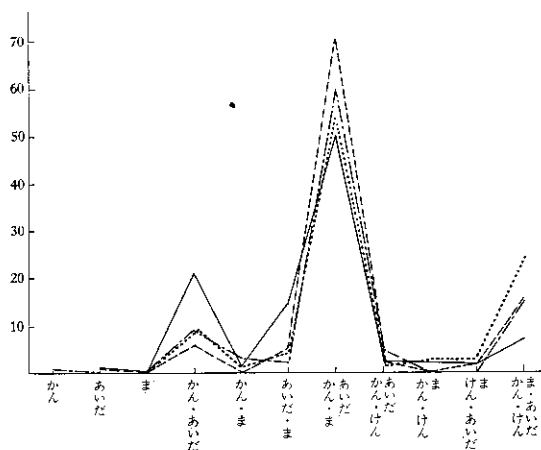
2. 初期学習の10字

まず、小学生・中学生のみを対象とした30字から選んだ10字について集計結果を示す。これらの文字は、二年～四年配当の教育漢字である。

〈間〉

音〈かん〉と訓〈あいだ〉は、いずれも早期に充足されるが、〈あいだ〉のほうが時期も早く、率も高い。訓〈ま〉は、小学校六年でほぼ充足した数値を示すが、中学に入っても発展がない。音〈けん〉は、段階的に増加するが、中学三年でも30パーセントに達しない。全体として、一音二訓型の文字といえ

間 (2)	小 五 (154 人)	小 六 (192 人)	小 計 (346 人)	中 一 (205 人)	中 三 (205 人)	中 計 (410 人)
か ん	127 (82)	177 (92)	304	190 (93)	194 (95)	384
け ん	16 (10)	35 (18)	51	40 (20)	59 (29)	99
あ い だ	149 (97)	187 (97)	336	187 (91)	199 (97)	386
ま	106 (69)	173 (90)	279	168 (82)	179 (87)	347
は ぎ ま*				5 (2)	1	6



る。

読みの型は、初期学習の文字の中では珍しく、学年間の変化が少く、似た経過を示す文字である。それはこの文字が年齢による読みの発展の少ない文字であることを物語っている。

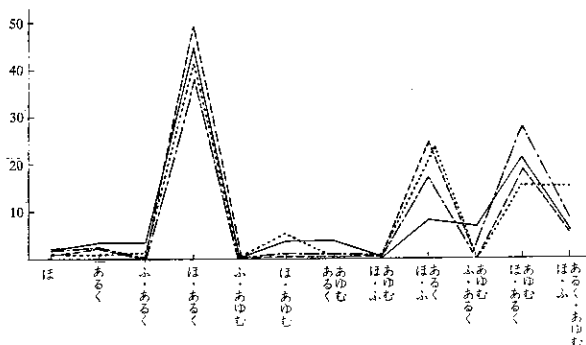
異読の比較的少ない文字で、〈もん〉(間)が

5・6例。その他、〈とい〉(問)、〈だい〉——(問題)の二重ミス?——などが見られた程度である。

〈歩〉

訓〈あるく〉は、小学校五年ですでに十分充足される。次いで、音〈ほ〉も当初から高い数値を示し、六年で完全に充足される。音〈ふ〉は、20~30パーセント台を上下して発展を見せず、ようやく中学三年でやや上昇する程度。

歩 (2)	小 五 (154人)	小 六 (192人)	小 計 (346人)	中 一 (205人)	中 三 (205人)	中 計 (410人)
ほ	127	186	313	193	201	394
	(82)	(97)		(94)	(98)	
ふ	38	57	95	52	81	133
	(25)	(30)		(25)	(40)	
あ る く	146	187	333	198	196	394
	(95)	(97)		(97)	(96)	
あ ゆ む	62	44	106	79	67	146
	(40)	(23)		(39)	(33)	



訓〈あゆむ〉も同様にはかばかしい発展が見られない。一音一訓型の文字と考えられる。

読みの型も上記のような傾向を反映して、どの学年も似たようなカーブをえがいている。つまり、被験者の半数ぐらゐは、〈ほ・あるく〉と読んでおり、

25 パーセント内外の者が、それぞれこれに〈ふ〉か〈あゆむ〉かを加えている、ということになる。そして学年間の差が非常に少い。

異読では、小学校、中学校を通じて〈と〉が5・6例あったのは、他に〈とほ〉という記入のあったことも考え合わせると、「徒歩」の記憶違いでもあろうか。その他には、〈はかる〉〈あし〉など意味上の混同が多かった。中学校で〈しょう〉〈わたる〉が各3例ほど見られたのは、「渉」からの類推でもあろう。

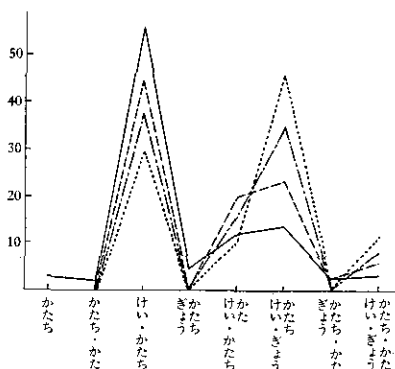
〈形〉

訓〈かたち〉が最も充足率が高く、小学校ですでに完全に近い。音〈けい〉も、小学校五年と中学三年で90パーセントを割るが、ほぼ全学年にわたって充足されている。音〈ぎょう〉は、小学校五年から中学一年まで10パーセントずつ伸び、中学三年でかなり伸びるが、充足には遙かに遠い。訓〈かた〉は、全学年にわたってほぼ同じ比率を示し、発展は見られない。

読みの型は、〈けい・かたち〉と〈けい・ぎょう・かたち〉の二つに集中しているが、学年によって両者が対照的なのが注目される。〈ぎょう〉の段階的な伸びをそのまま反映しているのであろう。全般として一音一訓型と二音一訓型の中間にある文字と見られる。

〈表 3〉

形* (3)	小 五 (154人)	小 六 (192人)	小 計 (346人)	中 一 (205人)	中 三 (205人)	中 計 (410人)
け い	136	192	328	198	180	378
	(89)	(100)		(97)	(88)	
ぎ ょ う	39	67	106	92	123	215
	(25)	(35)		(45)	(60)	
か た ち	147	192	339	197	200	397
	(95)	(100)		(96)	(98)	
か た	37	56	93	53	47	100
	(24)	(29)		(26)	(23)	



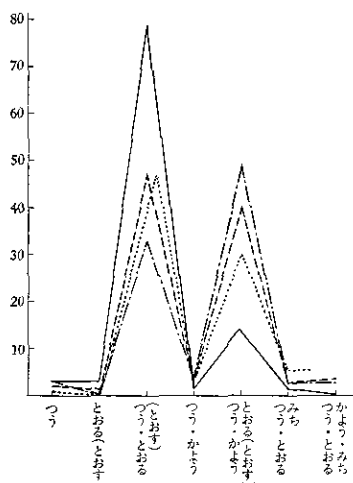
異読は少い文字で、くすがた〈くにぎよう〉くしけい〉(「紙型」?)など、意味上の類似にもとづくものが散見する程度である。

〈通〉

音くつう〉と訓くとおる〉は、共に小学校五年でほぼ完全に充足される。訓くかよう〉は、小学校六年、中学一年と著しい伸びを示すが、中学三年では逆に減少する。代りに表外訓くみち〉が中学三年でかなり増加する。

読みの型は、くつう・とおる〉に8割近く集中する小学校五年と、これとくつう・かよう・とおる〉との2個所に山の分かれる他の学年とで対照的な集

通* (3)	小 五 (154人)	小 六 (192人)	小 計 (346人)	中 一 (205人)	中 三 (205人)	中 計 (410人)
つ う	150	188	338	202	201	403
	(97)	(97)		(99)	(98)	
と お る	148	174	322	189	183	372
	(96)	(91)		(92)	(89)	
と お す	2	5	7	10	23	33
	(1)	(3)		(5)	(11)	
か よ う	24	94	118	127	90	217
	(16)	(48)		(62)	(44)	
み ち*	2	9	11	5	25	30
	(1)	(5)		(2)	(12)	



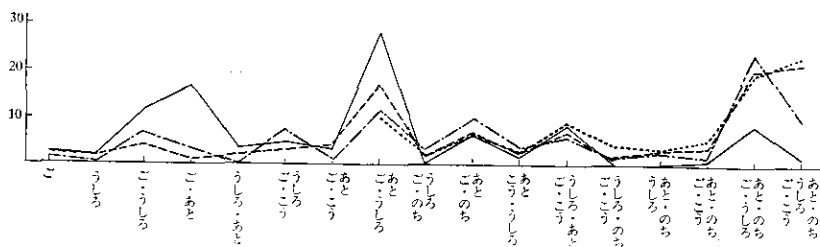
中を示す。〈かよう〉の多寡が影響していると見られるが、この二つの読み以外にはほとんど分散しないのもこの文字の特徴である。全体としては、一音一訓と一音二訓との中間型であろう。

〈つづく〉〈わたる〉などの異読は、意味内容の類似にもとづくもの。〈すすむ〉(進)〈すぎる〉(過)などは、意味の類似による。字形の類似によるとも考えられ、判定しにくい。その他、〈こう〉(交)など熟語がらみの異読もあった。

〈後〉

音くごは、小学校五年の段階でほぼ完全に近い充足を示す。音くこうは、小学校六年と中学三年でかなり伸びるが、最終的にも50パーセント台に

後* (3)	小 五 (154人)	小 六 (192人)	小 計 (346人)	中 一 (205人)	中 三 (205人)	中 計 (410人)
こ	139	173	312	180	186	366
	(90)	(90)		(88)	(91)	
こ う	37	84	121	75	112	187
	(24)	(44)		(37)	(55)	
う し ろ	109	149	258	159	172	331
	(71)	(78)		(78)	(84)	
の ち	31	112	143	114	131	245
	(20)	(58)		(57)	(64)	
あ と	122	168	290	159	179	338
	(79)	(88)		(76)	(87)	



止まる。訓〈あと〉は、音〈ご〉に次いで高い充足を示すが、学年を追って伸びることが少い。訓〈うしろ〉は、小学校五年から中学一年までの間あまり変わらず、中三に至ってやや伸びる。〈のち〉は、小学六年で伸びるが、その後はあまり変化がない。訓〈のち〉は六年で大きく伸びるが、そのあとの発展がない。

読みの型は、非常に多くの型に分散し、小学校五年以外は、よく似た経過をたどる。これはこの文字の読みが、それぞれ早くから充足されるためである。全体として、一音二訓型であるが、多読型ともいえる要素をもっている。

異読は少く、中学校で〈おわり〉が3例ほど。その他、〈しゅう〉(終?)もこれと同じく意味内容の類似によるものであろう。

〈重〉

音〈じゅう〉、訓〈おもい〉は、共に小学校五年で完全に充足される。音〈ちょう〉は、小学校六年で著しく伸び、さらに中学三年で伸びて50パーセントを超える。訓〈かさねる〉は、各段階で増加するが、最終的に40パーセントに達しない。〈かさなる〉のほうは、学年を追っての伸びが見られず、減少するところもあって不安定である。〈え〉は次第に増加するが充足率は低い。全体としては一見多読型のようで、実質は一音一訓型というべきであらう。

読みの型は、〈じゅう・おもい〉に集中する小学校五年と、多様化が進み各種の型に分散する中学三年とが対照的な線をえがき、小学校六年と中学一年とがその中間にある。

異読で多かったのが〈はかる〉(量)で、これは意味の類似による類推であらうか。その他、〈りょう〉(重量)・〈けい〉(軽重)のように、熟語がからむ異読もいくつか見られた。

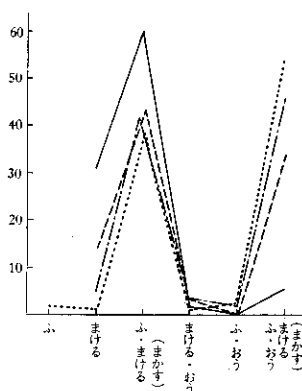
〈負〉

訓くまけるは、小学校五年でほぼ完全充足に近い。音くふは、各学年段階で平均した伸びを示し、中学三年でほぼ完全に充足される。訓くおうは、小学校六年できわだった伸長を示すが、以後はむしろ停滞する。

読みの型では、くふ・まけるとくふ・まける・おうの2個所にはっきり集中し、かつ、小学校五年と他の学年との間にはっきりした差がある。一音一訓から一音二訓型への移行型とでもいえよう。

異読は初期学習文字の中で最も多かった。中でも「敗」と混同してくはい>

負 (3)	小 五 (154 人)	小 六 (192 人)	小 計 (346 人)	中 一 (205 人)	中 三 (205 人)	中 計 (410 人)
ふ	100	148	248	184	199	383
	(64)	(77)		(90)	(97)	
ま け る	149	188	337	196	195	391
	(97)	(97)		(96)	(95)	
ま か す		11	11	3	27	30
		(6)		(1)	(13)	
お う	10	103	113	104	121	225
	(6)	(53)		(51)	(59)	

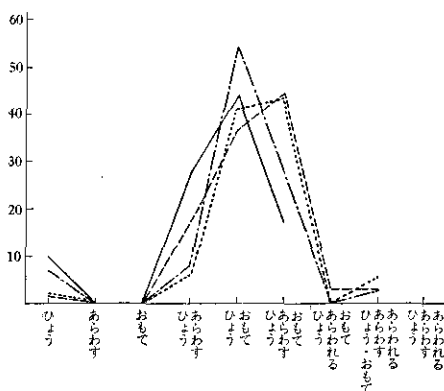


と読んだものが小学校で 50 例、中学校で 15 例と圧倒的に多い。続いて熟語の覚えちがいによると思われるくしょう>(勝負)が小中合わせて 30 例ほど。数は少ないが、くぼく>(敗北)のように二重の誤りもあった。その他、字形の類似に起因するらしいくさだ>(貞)・くたく>(卓)・くせ>(背)・くかい>(貝)なども見られた。

〈表〉

音〈ひょう〉は、小学校五年で十分に充足されている。訓〈おもて〉は、小学校六年でやや充足に近い数値を示すが、その後の発展が少く、完全充足には一步及ばないまま推移する。また、訓〈あらわす〉は、45~60パーセントの間を上下して安定しない。結局、この文字は、充足されるべきものは当初から充足され、その他の読みは、どの学年でも同じ程度、という発展性の少ないものの一つである。図に示した読みの型もそういった性格を反映して、どの学年の線もほぼ似かよったカーブをえがいている。

表 (3)	小 五 (154 人)	小 六 (192 人)	小 計 (346 人)	中 一 (205 人)	中 三 (205 人)	中 計 (410 人)
ひ ょ う	152	190	342	201	202	403
	(99)	(99)		(98)	(99)	
お も て	96	161	257	175	185	360
	(62)	(84)		(85)	(90)	
あらわす	70	117	187	92	111	203
	(45)	(61)		(45)	(54)	
あらわれる		5	5	1	15	16
		(3)			(7)	



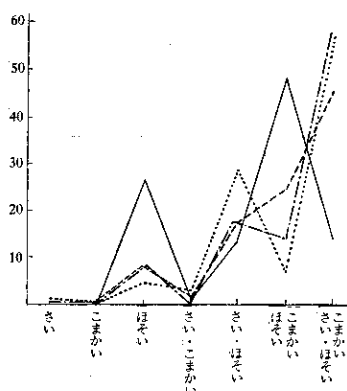
異読で比較的多かったのが〈たわら〉(俵)と〈うら〉(裏)で、前者は字形の類似によると思われる、後者は意味のとり違えとも熟語(表裏)の記憶違いとも考えられ、決定しにくい。他に〈あきらか〉〈くしめす〉などは、意味上の類推によるものであろうか。〈ぐらふ〉が小学校で2例ほどあった。

〈細〉

訓〈ほそい〉は、小学校五年ですでに完全に充足される。訓〈こまかい〉は、60~70 パーセント台を上下して発展が見られない。音〈さい〉は、小学校六年で著しく伸び、以後段階的に増加して、中学三年でようやく充足に近い線に達する。訓読み主導型で一音二訓型の文字といえよう。読みの型は、〈さい〉の出現率の差を反映して、小学校と中学校とでかなり違った線をえがいており、小学校の中でも五年と六年との差がかなり著しい。

異読の中では、〈しん〉〈せん〉〈し〉などという記入が多かった。これらはそれぞれ、「細心」「繊細」「子細」などの熟語の不十分な記憶にもとづくものと思われる。同様なものに〈しょう〉(詳細)〈ぼう〉(細胞)〈もう〉(毛細?)

細 (3)	小 五 (154 人)	小 六 (192 人)	小 計 (346 人)	中 一 (205 人)	中 三 (205 人)	中 計 (410 人)
さ い	41	125	166	157	182	339
	(27)	(65)		(77)	(89)	
ほ そ い	151	184	335	202	195	397
	(98)	(96)		(99)	(95)	
こ ま か い	95	139	234	149	136	285
	(62)	(73)		(73)	(66)	



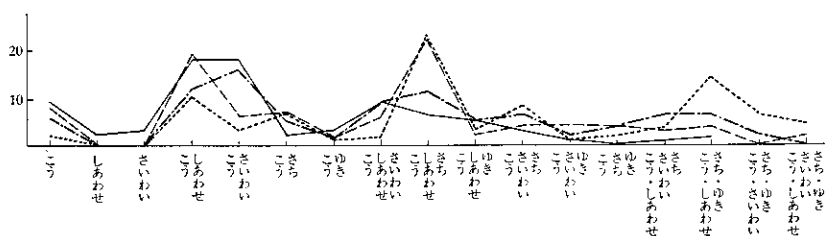
などもあった。その他、〈みじかい〉のように意味上の関連、〈はたけ〉(畑)のように字形の類似によると思われるものも散見する。

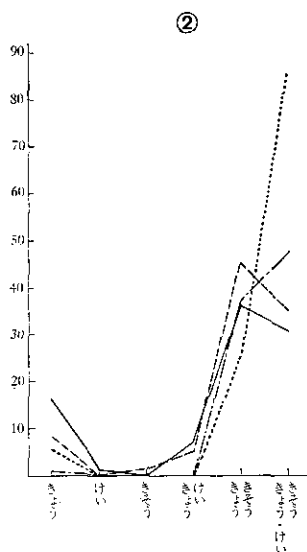
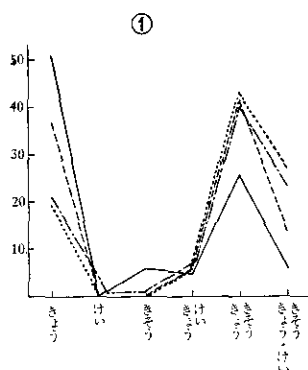
〈幸〉

音くこうは、当初から高い数値を示し、六年でほぼ完全に充足される。訓くしあわせは、50~60パーセント台を上下して発展がない。くさいわいも減少増加を反覆するのみで発展しない。くさちは、当初の数値は低い、小学校六年と中学三年で著しく伸びて、最終的には他の訓読みをリードする。また、表外訓くゆきは、段階的に伸長を示すが数値は低い。以上のことは、この文字が一応は一音二訓型であっても、訓読みの普及性の少い文字であることを物語っている。

読みの型は、非常に多くの型に分散し、集中度が低い。しかも、学年によって集中する個所に差が見られ、この文字の読みがかなり不安定であることを示している。

幸* (4)	小 五 (154人)	小 六 (192人)	小 計 (346人)	中 一 (205人)	中 三 (205人)	中 計 (410人)
こ う	127	178	305	192	195	387
	(82)	(93)		(94)	(95)	
し あ わ せ	80	117	197	106	134	240
	(52)	(61)		(52)	(65)	
さ い わ い	70	55	125	102	62	164
	(45)	(29)		(50)	(30)	
さ ち	34	94	128	92	147	239
	(22)	(49)		(45)	(72)	
ゆ き*	30	37	67	49	74	123
	(19)	(19)		(24)	(36)	





分の一に止まる。訓〈きそう〉は、同じく段階的に増加し、高三から大学にかけて充足状態に達する。

読みの型は、図①で、小学校五年を除く他の学年がほぼ同じカーブをえがいているのが注目される。また、②では、〈けい〉の差を反映して成人とその他との差が著しい。

異読では、〈そう〉(競争)・〈ぎ〉(競技)など、熟語に由来するものが比較的多かった。小学校で〈かがみ〉(鏡)があったのは、字形の類似によるものとも、同音にひかれたものとも両方考えられる。この延長上には、〈めがね〉や〈がね〉(眼鏡)というような記入もあった。

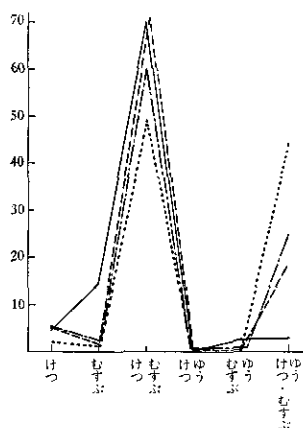
〈結〉

音〈けつ〉と訓〈むすぶ〉とは、小学校六年でほぼ充足され、その後ほぼ拮抗した数値を示しながら推移する。訓〈ゆう〉は、年齢を追って段階的に伸びるが、数値の上では〈むすぶ〉には及ばない。

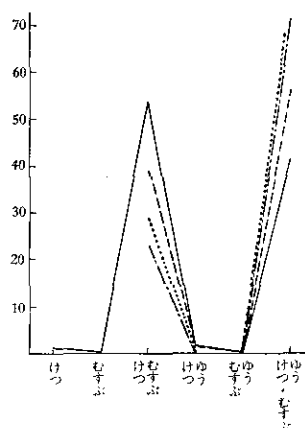
読みの型では、図①が珍しくどの学年も同じような経過をたどっている。②では、高一が〈けつ・むすぶ〉に山があるのに、他は〈けつ・むすぶ・ゆう〉に山がきている。〈けつ〉と〈むすぶ〉が早期に充足され、第三の読み〈ゆう〉が遅く発達するのがこの文字の特徴であろう。

結 (4)	小五 人 (154)	小六 人 (192)	小計 人 (346)	中一 人 (205)	中三 人 (205)	中計 人 (410)	高一 人 (258)	高三 人 (193)	高計 人 (451)	大学 人 (175)	成人 人 (21)
け　　つ	121	185	306	190	195	385	249	189	438	166	21
	(79)	(96)		(93)	(95)		(97)	(98)		(95)	(100)
む　　す　　ぶ	136	178	314	183	196	379	247	188	435	166	21
	(88)	(93)		(89)	(96)		(96)	(97)		(95)	(100)
ゆ　　う	8	38	46	61	107	168	128	123	251	146	14
	(5)	(20)		(30)	(52)		(49)	(63)		(83)	(66)

①



②



あまり集中的な異読の例はない。各学年にわたって見られたものに、〈こん〉がある。これは「結婚」の記憶違いであろう。中学校では、〈よめ〉(嫁)にまで発展させた例があった。その他には、〈つなぐ〉〈くしめる〉〈あつめる〉など、意味上の結びつきを求めた読みが散見した程度である。

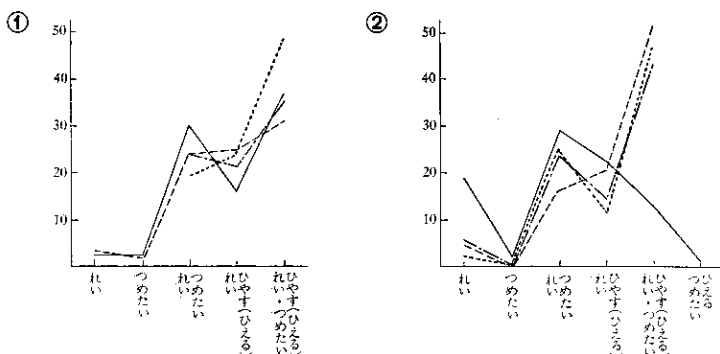
〈冷〉

音〈くれい〉は、小学校の段階ではほぼ完全に充足される。訓〈つめたい〉は、中学校の段階で大きく伸びるが、以後は停滞し、大学に至っても充足状態には達しない。訓〈ひえる〉と〈ひやす〉とは、よく似た傾向を示し、どちらも小学校六年生で伸びるが、以後あまり変化がなく、停滞状態が続く。

読みの型では、小学校五年生を別として、その他は、学年年齢の差があまり見られないのがこの字の特徴である。また、〈ひやす(ひえる)〉の読みは、単独で出現することがなく、〈くれい〉〈つめたい〉など他の読みと共に出現することがわかる。

異読では、全段階を通して、〈こおり〉(氷) 〈りょう・すずしい〉(涼) など、意味上近縁関係にある語との混同が見られた。他に〈とう〉の読みが散見したのは、「冷凍」に起因するものと思われる。

冷 (4)	小五人 (154)	小六人 (346)	小計人 (346)	中一人 (205)	中三人 (205)	中計人 (410)	高一人 (258)	高三人 (193)	高計人 (451)	大学人 (175)	成人人 (21)
れ い	138	188	326	199	204	403	253	190	443	161	21
	(90)	(98)		(97)	(99)		(98)	(98)		(92)	(100)
つめたい	74	123	197	152	159	311	178	109	287	106	15
	(48)	(36)		(74)	(76)		(69)	(56)		(61)	(71)
ひえる	41	102	143	77	93	170	114	88	202	77	12
	(27)	(53)		(38)	(45)		(44)	(49)		(44)	(57)
ひやす	25	76	101	77	105	182	109	91	200	84	10
	(16)	(40)		(38)	(51)		(40)	(47)		(48)	(48)
さめる	6	7	13	7	2	9	2		2	2	2
	(4)	(4)		(3)	(1)		(1)			(1)	(10)
さます	1	1	2	2	1	3	2		2		2
				(1)			(1)				(10)



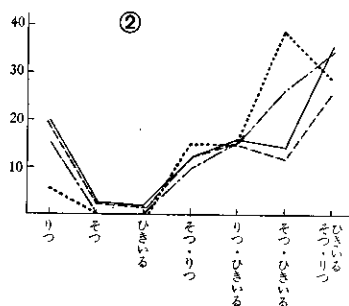
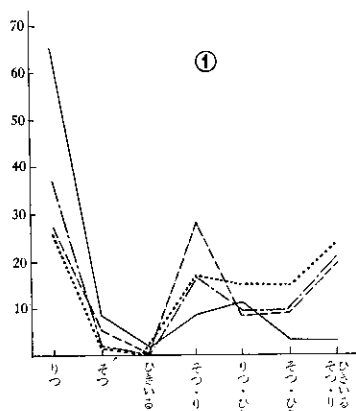
〈省〉

音くしょうは、小学校五年生から高率を示し、六年生でほぼ完全に充足される。音くせいは、小学校六年生で大きく伸び、以後ゆるやかに増加して、大学の段階で再び大きく伸びる。訓くはぶくは、中学校までほぼ同じ程度に推移し、高校—大学と続いて伸長を示す。訓くかえりみるは、中学校の段階で急増するが、中三以後はほとんど変化しない。

読みの型では、かなり多くの型に分散するのがこの字の特徴である。図の①では、くしょう単独の読みとくしょう・はぶくとの読みに最大の山があるのに、②では、くしょう・せい・はぶくくに最大の山があって、両者はかなり対

省*	小五 (154)	小六 (192)	小計 (346)	中一 (205)	中三 (205)	中計 (410)	高一 (258)	高三 (193)	高計 (451)	大学 (175)	成人 (21)
せい	30 (19)	95 (49)	125	100 (49)	113 (55)	213	148 (57)	113 (59)	261	127 (73)	14 (67)
しょう	127 (82)	180 (94)	307	195 (95)	201 (98)	396	255 (99)	191 (99)	446	172 (98)	21 (100)
はぶく	72 (47)	114 (59)	186	108 (53)	98 (48)	206	178 (69)	127 (66)	305	134 (77)	19 (90)
かえりみる	2 (1)	26 (14)	28	56 (27)	72 (35)	128	73 (36)	67 (35)	140	65 (37)	9 (43)

率* (6)	小五人 (154)	小六人 (192)	小計人 (346)	中一人 (205)	中三人 (205)	中計人 (410)	高一人 (258)	高三人 (193)	高計人 (451)	大学人 (175)	成人人 (21)
り つ	131 (85)	171 (89)	302	173 (84)	164 (80)	337	222 (86)	141 (73)	363	127 (73)	13 (62)
そ つ	30 (19)	101 (53)	131	103 (50)	118 (58)	221	162 (63)	100 (52)	262	119 (68)	17 (81)
ひきいる	27 (18)	70 (36)	97	80 (39)	107 (52)	187	168 (65)	106 (55)	274	128 (73)	17 (81)
ゐ る*							2 (1)	5 (3)	7		



いうことを物語っていよう。図②に見るように、高校生以上では読みの型がほぼ同じような推移をたどるが、それもくそつが加わると、年齢的な差がかなり出てくる。

異読では、〈いん〉(引率)・〈ちよく〉(率直)・〈けい〉(軽率)など、熟語の読み誤りに起因するものが多い。〈ひく〉という記入は、「引」と誤った上でこれを訓読したのか、〈ひきいる〉の読みをあいまいに記憶しているのか不明。〈しょう〉は「勝率」であろうか。高校に〈みちびく〉があったのは、意味上の類推であろう。

〈難〉

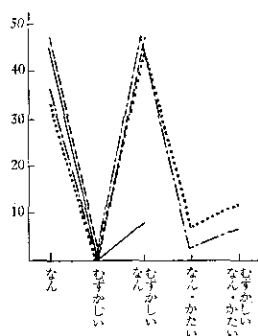
音〈なん〉は、小学校六年でほぼ完全に充足され、訓読みに比べて常に上位を占める。訓くむずかしいは、小学生から中学生まで段階を追って伸びてゆくが、高校以後は停滞し、成人を別にすれば、充足状態には達しない。訓くかたいは、中学生から表れ、高校生でかなり増加するが、だいたいくむずかしいの半分以下の数値を保つて推移する。

読みの型では、図①の小学校五年・六年にくかたいを含むものがないが、それ以外は、図の①、②ともに非常に似た数値を示し、学年による差が少い。それは、この文字が、音読みは早期に充足されてしまい、訓読みがなかなか発展しないことを示すものである。

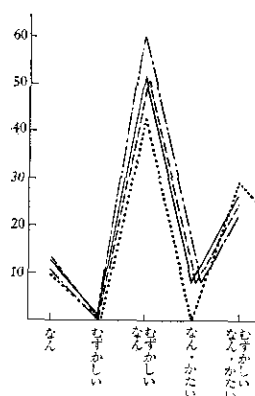
異読では、くなだという読みが、小学生と中学生で各30例ぐらいあった。

難 (6)	小五人 (154)	小六人 (192)	小計人 (346)	中一人 (205)	中三人 (205)	中計人 (410)	高一人 (258)	高三人 (193)	高計人 (451)	大学人 (175)	成人人 (21)
な　　ん	82 (53)	184 (96)	266	153 (75)	199 (97)	352	257 (99)	193 (100)	450	174 (99)	21 (100)
むずかし い	11 (7)	89 (46)	100	111 (54)	116 (57)	227	203 (79)	149 (77)	352	114 (65)	19 (90)
か　た　い				17 (8)	38 (19)	55	89 (34)	67 (35)	156	49 (28)	6 (29)

①



②



高校でもかなり見られたが、「灘」との混同であろうか。その他、〈だれ〉(誰)〈ざつ〉(雑)など字形の類似によるものが二、三。〈こん〉(困難)・〈かん〉(艱難)・〈さい〉(災難)など、熟語の誤解に起因するものも散見した。

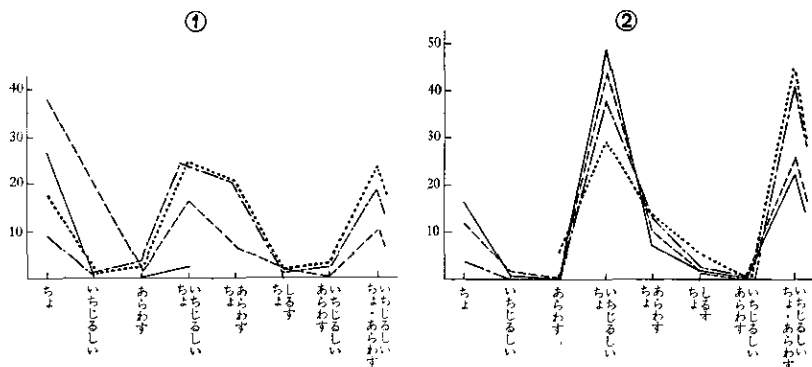
〈著〉

音〈ちよ〉は、小学校六年で著しく伸び、以後次第に増加して、高校で完全に充足される。訓〈いちじるしい〉は、高校一年まで年齢を追って段階的に伸びるが、それ以後は横ばいで、最終的にも充足状態には達しない。訓〈あらわす〉は、中学でかなり増加して〈いちじるしい〉に接近するが、それ以後あまり伸びず、大学でも 50 パーセント台に止まる。

読みの型では、図①で、小学校五年が〈ちよ・いちじるしい〉で止まるのをはじめ、学年間の差がかなり目だつ。図②では各年齢段階とも、読みが二つの型に集中してくるが、高校生と大学生・成人とで、対照的な集中度を示しているのが面白い。この文字は、小学生や中学生にはかなり読みにくい文字であり、高校生以上になってようやく読みが安定するようである。

異読の多い文字であるが、中でも多かったのが〈しゃ〉〈しょ〉で、小学生、中学生ともに 20~30 例ほど見られた。「者」「署」「諸」などからの類推であろう。〈しゃ〉は「著者」の記憶違いとも考えられる。〈あつい〉(暑)・〈ちやく〉

著 (6)	小五人 (154)	小六人 (192)	小計人 (336)	中一人 (205)	中三人 (205)	中計人 (205)	高一人 (258)	高三人 (193)	高計人 (451)	大学人 (175)	成人人 (21)
ち　　よ	43	144	187	154	180	334	253	187	440	174	20
	(28)	(75)		(75)	(88)		(98)	(97)		(99)	(95)
いちじる しい	3	55	58	93	111	204	194	143	337	140	15
	(2)	(29)		(45)	(54)		(75)	(74)		(80)	(71)
あらわす	1	43	44	88	94	182	78	71	149	92	14
		(22)		(43)	(46)		(30)	(37)		(53)	(67)
あらわれ る*					1	1	3	1	4	1	
							(1)				
し　る　す*		6	6	6	10	16	12	13	25	12	2
		(3)		(3)	(5)		(5)	(7)		(7)	(10)



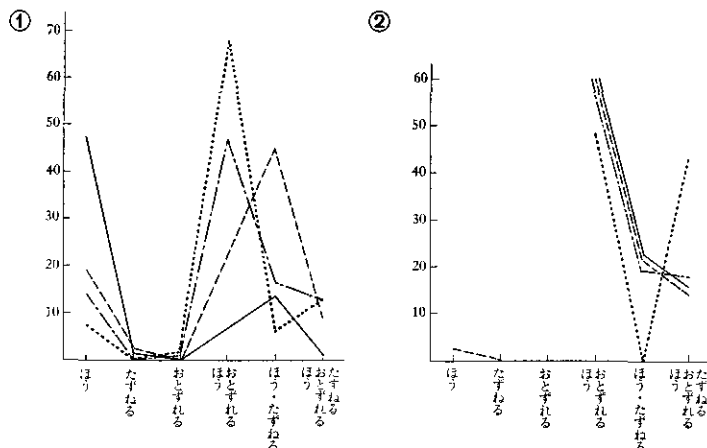
(着)・くにくる(煮)・くはし(箸)などは、字形の類似によるもの。その他、くひつ(筆)・くかく(書)・くさく(作)など、意味の類似にひかれたと思われるものも、散発的ながかなりの数にのぼっている。

〈訪〉

音くほうは小学生から高い数値を示し、六年生でほぼ完全に充足される。訓くたずねるは、小学校六年でかなり高い数値を示すが、それ以後は30~40パーセント台に停滞する。逆にくおとずれるは、中学一年で著しく伸び、以後常にくたずねるをリードして、成人でほぼ充足される。

読みの型では、図①のほうが、学年によって山の個所も高さもまちまちな

訪*	小五人 (154)	小六人 (192)	小計人 (346)	中一人 (205)	中三人 (205)	中計人 (410)	高一人 (258)	高三人 (193)	高計人 (451)	大学人 (175)	成人人 (21)
ほう	106 (69)	180 (94)	286	186 (91)	196 (96)	382	246 (95)	193 (100)	439	174 (99)	21 (100)
たずねる	26 (17)	107 (56)	133	63 (31)	40 (20)	103	103 (40)	73 (38)	176	69 (39)	11 (52)
おとずれる	14 (9)	56 (29)	70	126 (61)	170 (83)	296	194 (75)	144 (75)	338	138 (79)	19 (90)
わ	10 (6)	9 (5)	19	17 (8)	31 (15)	48	2 (1)	2 (1)	4	1	



のに、図②は高校と大学の線が三つともほぼ重なっており、読みの型の変化の少いことを示している。この文字は、特に訓読みが早い段階ではむしろ少く、高校生以上になってようやく安定するもののようである。

異読と思われるものでは、〈くす〉という記入が小学校から高校まで最も多かった。恐らく「諏訪」の記憶違いによるものらしい。それは、〈くわ〉という読みがけっこう多かったことから察せられる。その他は、熟語「訪問」に起因する〈もん〉や、〈ほう・ふせぐ〉(防)のような字形からする誤りが散見する程度であった。二重の誤りと思われるのは〈がい〉で、これは「妨害」にもとづくのであろう。

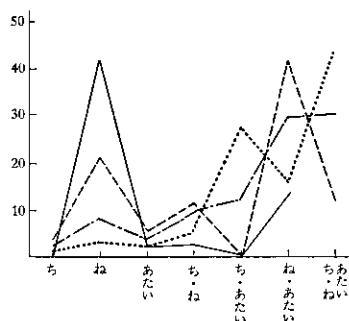
〈値〉

訓〈ね〉は、比較的早期(小学校六年生ぐらい)に充足されるが、中学生以後は停滞し、成人を除いてめだつた伸びを示さない。音〈ち〉は、中学一年で著しく伸び、中三でさらに充足されるが、そこで安定し、以後は成人を除けばあまり変化しない。訓〈あたひ〉は、小学校六年で著しい増加を見せ、以後次第に伸びて、高校一年でほぼ充足される。

読みの型では、①の図が各学年段階での変化が著しいことを示しているのに、②の図では、年齢段階による変化がほとんどない。また、①のうちでは中三の線が②の図に近い数値を示している。これは、この字の読みが中三でほぼ決まってしまうことを物語るものであろう。

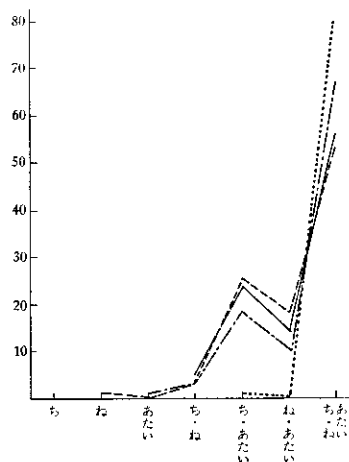
異読のうち多かったのは〈か〉で、次いで〈だん〉が多かった。これらはい

値*	小五人 (154)	小六人 (192)	小計人 (346)	中一人 (205)	中三人 (205)	中計人 (410)	高一人 (258)	高三人 (193)	高計人 (451)	大学・ (175)	成人 (21)
ち	7	51	58	112	155	267	220	156	376	132	20
	(5)	(19)		(55)	(76)		(85)	(73)		(75)	(95)
ね	89	166	255	150	114	264	196	144	340	134	19
	(58)	(86)		(73)	(56)		(76)	(75)		(77)	(90)
あた い	24	112	136	141	178	319	242	187	429	165	20
	(16)	(58)		(69)	(87)		(94)	(97)		(94)	(95)



① ずれも「価値」「値段」など熟語にもとづく誤りである。これらは、この字の単独の読みの充足率の低いことも考え合わせると、この文字が単独ではあまり使用されないことを物語っている。その他の異読では、くちよく・じき・なお〈直〉・くしよく・うえる〈植〉など、字形の類似にもとづくものがこれに続く。くくらしい」という記入があったのは、「位置」を

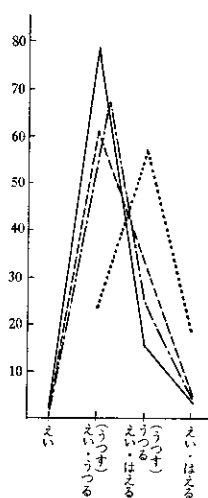
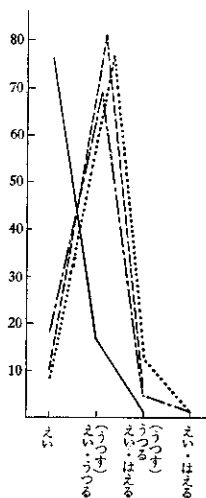
② 介する二重の誤りであろう。



〈映〉

音くえい〉は、小学校五年ですでに完全に充足されるが、訓くうつすくうつるは、小学校六年で著しい伸びを示すものの、それ以後あまり顕著な増加を見せず、大学でも50~60パーセント台に止まる。訓くはえるは、高校三年と大学でかなりの伸びを示すものの、それも成人の半分以下である。

映*	小五人 (154)	小六人 (192)	小計人 (346)	中一人 (205)	中三人 (205)	中計人 (410)	高一人 (258)	高三人 (193)	高計人 (451)	大学・ (175)	成人人 (21)
え い	145 (94)	187 (97)	332	201 (98)	204 (99)	405	258 (100)	192 (99)	450	175 (100)	21 (100)
うつる	8 (5)	77 (40)	85	94 (46)	103 (50)	197	157 (61)	116 (60)	273	118 (67)	15 (71)
うつす	20 (13)	105 (55)	125	89 (43)	117 (57)	206	147 (57)	96 (50)	243	88 (50)	4 (19)
はえる	4 (3)	12 (6)	16	21 (10)	27 (13)	48	49 (19)	71 (37)	120	59 (34)	16 (76)



読みの型では、図①で小学校五年がくえい〉単独の読みに集中しているのと、六年生から中学生にかけて複数の読みに集中しているのが対照的である。図②でも、高校・大学はくえい・うつる(うつす)に山があつて中学生などの読みと共通するが、成人のみは、これにくはえる〉を加えた型に山が来ている。この文字の読みは、小学校六年生以後あまり発展がないと言ってよい。

異読は少い文字で、くが> (画)・くしゃ> (写)など、熟語にもとづくと思われる読みが、小学校・中学校で二、三見られる程度であった。

〈試〉

音くし>は、小学校段階で充足状態に達し、常に他の読みをリードする。二つの訓読みの中では、くころみる>が小学校から大学まで全段階でくためす>よりも高い数値を示し、大学生でほぼ充足状態に近づく。ただし、両者の差は、高校一年以後急速に接近し、成人に至るとくためす>のほうが上位に立つ。

異読としては、小学校でくしき> (式) くまこと> (誠)など、字形上の類推や誤読によるものが多いのに対し、中学・高校でくころざす>という読みが目だったのは、恐らくくころみる>の記憶違いによるものであろう。他に、くけん> (試験)のように熟語に起因するものもあった。

試 (4)	小五 人 (154)	小六 人 (192)	小計 人 (346)	中一 人 (205)	中三 人 (205)	中計 人 (401)	高一 人 (258)	高三 人 (193)	高計 人 (451)	大学 人 (175)	成人 人 (21)
し	136	180	316	195	203	398	256	193	449	174	21
	(88)	(93)		(95)	(99)		(99)	(100)		(99)	(100)
ためす	11	58	69	75	97	172	189	134	331	129	20
	(7)	(30)		(37)	(47)		(73)	(69)		(74)	(95)
ころみる	38	101	139	119	150	269	194	137	331	146	17
	(25)	(53)		(58)	(73)		(75)	(71)		(83)	(81)

〈治〉

音くち(じ)>は、小学校ですでにほぼ充足される。対して、訓くなおる>くなおす>は共に年齢的な発展がなく、中学以後はくなおす>がややリードするものの、最高でも40パーセントに止まる。また、訓くおさめる>は、小学校六年で飛躍的に伸び、以後段階的に増加して大学から成人にかけてはほぼ充足される。訓くはる>は、小学校から大学までほとんど変化がない。この文字は、中学校段階以後あまり読みが発展しない型の一である。

異読の例としては、くたい・だい> (台) くはじめ> (始)など、字形の類似にもとづく誤りないし類推と思われるものが、小学校から高校まで散見する。小

学生でくめいくせいくりょうなどがあつたのは、それぞれ「明治」「政治」「療治」などに起因するのであろう。中学生でくさだが3例ほどあつたのは、「定」との混同というより、「貞治」の記憶違いかと思われる。

治 (4)	小五人 (154)	小六人 (192)	小計人 (346)	中一人 (205)	中三人 (205)	中計人 (410)	高一人 (258)	高三人 (193)	高計人 (451)	大学人 (175)	成人 (21)
ち(じ)	133	161	294	182	202	384	253	191	444	172	21
	(86)	(84)		(89)	(99)		(98)	(99)		(98)	(100)
な お る	47	33	80	28	22	50	48	35	83	38	6
	(31)	(17)		(14)	(11)		(19)	(18)		(22)	(29)
な お す	26	41	67	45	55	100	103	72	175	57	7
	(17)	(21)		(22)	(27)		(40)	(37)		(33)	(33)
おさまる		11	11	1	11	12	2	2	4	3	
		(6)			(5)		(1)	(1)		(2)	
おさめる	9	101	110	126	152	278	171	145	316	147	20
	(6)	(53)		(61)	(74)		(66)	(76)		(84)	(95)
は る*	33	47	80	33	44	68	69	52	121	43	10
	(21)	(24)		(16)	(21)		(27)	(27)		(25)	(48)

〈過〉

音くかは中学一年で著しく伸びて充足状態に達する。訓くすぎるは、小学校でくかよりも高い数値を示し、六年生で充足状態に近くなるが、以後の伸びはくかに比べてややにぶい。訓くあやまちは、大学・成人の段階でようやく伸びを示すが、全般的に低い数値に止まる。全般的に見て、中学以後、読みの発達のあまり期待できない文字の一である。

あまり集中的な異読はなかったが、比較的多かったのはくつうで、これは字形の類似(通)によるとも、熟語「通過」の誤読によるとも、意味の類似によるとも考えられ、判断がむずかしい。その他、くおう(追)・くこす(越)・くうず(渦)・くわざわい(禍)・くてき(適)などは、字形の類似によるものであろう。少数ながら、「過去」にもとづくらいくこという記入もあった。

過 (5)	小五 人 (154)	小六 人 (192)	小計 人 (346)	中一 人 (205)	中三 人 (205)	中計 人 (410)	高一 人 (258)	高三 人 (193)	高計 人 (451)	大学 人 (175)	成人 人 (21)
か	91	151	242	187	202	389	255	193	448	173	21
	(60)	(79)		(91)	(99)		(99)	(100)		(99)	(100)
すぎる	103	168	271	170	186	356	244	177	421	159	18
	(67)	(88)		(83)	(91)		(95)	(92)		(91)	(86)
すこす	1	15	16	30	50	80	44	29	73	35	10
		(8)		(15)	(24)		(17)	(15)		(20)	(48)
あやまち	3	2	5	4	15	19	14	18	32	38	4
	(2)	(1)		(2)	(7)		(5)	(9)		(22)	(19)

〈易〉

音〈えき〉は、早期に充足に近い数値を示し、以後漸増して、高校段階で充足される。音〈くい〉も年齢を追って増加するが、常に〈えき〉に一步遅れて推移し、大学でも70パーセント台に止まる。訓〈やさしい〉は、小学校六年で

易 (5)	小五 人 (154)	小六 人 (192)	小計 人 (346)	中一 人 (205)	中三 人 (205)	中計 人 (410)	高一 人 (258)	高三 人 (193)	高計 人 (451)	大学 人 (175)	成人 人 (21)
えき	109	144	253	169	171	340	230	175	405	158	20
	(71)	(75)		(82)	(83)		(89)	(91)		(90)	(95)
い	73	94	167	113	144	257	136	127	263	128	19
	(47)	(49)		(55)	(70)		(53)	(66)		(73)	(90)
やさしい		63	63	36	16	52	24	29	53	37	6
		(33)		(18)	(8)		(9)	(15)		(21)	(29)
やすい*	4	6	10	32	50	82	86	83	169	93	12
	(3)	(3)		(16)	(24)		(33)	(43)		(53)	(57)

急にかなりの率で出現するが、これは、学習の時期と重なったためであろう。中学高校とこの読みがむしろ減少しているのは、小学校以後の学習や生活の中でこの訓があまり使われないことを物語っている。表外訓の〈やすい〉のほうが、小学校では少いものの、中学三年よりあとでは、〈やさしい〉よりも常に優位に立っているのは注目される。いずれにしても、字音に比べて字訓の普及にくい文字の一であろう。

異読で多かったのが、〈よう〉(容易)・〈ぼう〉(貿易)など、熟語に結びつくものである。〈なん〉(難易)・〈かん〉(簡易)などもこの類であろう。この種の異読が多いことは、この文字の音読み優位ということに関連が深いと思われる。他には、〈ゆ〉(湯)・〈じょう〉(場)など、字形の混同によると思われるものも散見した。

〈潔〉

音〈けつ〉は、小学校段階ですでに完全に近く充足され、高校三年までは、他の三種の読みを合計してもなお〈けつ〉がリードするという状態である。この文字もまた音読み型であると言えよう。訓〈いさぎよい〉は、小一中一高と漸増するが、高校以後は増減があつて伸びが停滞し、むしろ、表外訓の〈きれい〉のほうが中一高一大とほぼ順調な伸びを見せているのが注目される。

各段階を通じて多かった異読は、〈せい〉で、これは「清潔」にもとづくも

潔*	小五人 (154)	小六人 (192)	小計人 (346)	中一人 (205)	中三人 (205)	中計人 (410)	高一人 (258)	高三人 (193)	高計人 (451)	大学人 (175)	成人人 (21)
けつ	142	163	305	178	189	367	250	189	439	172	21
	(92)	(85)		(87)	(92)		(97)	(98)		(98)	(100)
いさぎよい		59	59	90	89	179	156	92	248	102	14
		(31)		(44)	(43)		(60)	(48)		(58)	(67)
きよい*	4	7	11	21	89	110	70	67	137	80	11
	(3)	(4)		(10)	(43)		(27)	(35)		(46)	(52)
きれい*	1	3	4	1	1	2	4	4	8	2	
		(2)					(2)	(2)		(1)	

のであろう。同様な例としては、小学校でくこう(高潔)・くかん(簡潔)、中学校でくべき(潔癖)などが見られた。くし・むらさき(紫)・くそ(素?)・くしげ(繁)などは、いずれも字形の類似にもとづくものと思われる。

〈断〉

音くだんは、小学校段階ですではほぼ完全に充足され、すべての段階で他の読みよりも優位に立つ。訓くことわるは、中学一年までは漸増するが、それ以後は停滞し、訓くたつは、小学校段階では他より少いが、中学校では激増し、中学三年以後はくことわるをリードする。ただし、両者とも高校三年以後も70~80パーセント台に止まって、充足状態には達しない。音読み優位ながら、訓読みもかなり普及している文字といえよう。

異読では、くわたるくお・おうなどがかなり見られた。これは恐らく道路の「横断」にもとづくものであろう。くすすむくとまるなども同根かと思われる。中学ではくしんごうというのも見られた。その他は、くせつ(切断)・くぜつ(断絶)・くけつ(決断)など、熟語の覚え違いによるものが多い。

断* (6)	小五 人 (154)	小六 人 (192)	小計 人 (346)	中一 人 (205)	中三 人 (205)	中計 人 (410)	高一 人 (258)	高三 人 (193)	高計 人 (451)	大学 人 (175)	成人 人 (21)
だ ん	146	183	329	194	202	396	257	193	450	175	21
	(95)	(95)		(95)	(99)		(99)	(100)		(100)	(100)
ことわる	86	127	213	144	108	252	192	137	329	119	17
	(56)	(66)		(70)	(53)		(74)	(71)		(68)	(81)
た つ	4	55	59	86	131	217	160	141	301	128	18
	(3)	(29)		(42)	(64)		(62)	(73)		(73)	(86)
た え る*					6	6	5	4	9		
					(3)		(2)	(2)			
き る*		4	4		2	2				2	4
		(2)			(1)					(1)	(19)

〈遣〉

音〈い〉は、小学校六年で著しく伸び、中学一年に至ってほぼ充足される。これに対し、音〈ゆい〉は、小学校六年以後 20~30 パーセント台を上下して、安定した伸びを示さない。訓〈のこす〉は、中学三年から顕著に現われ、高校—大学—成人と漸増するが、最終的にも 50 パーセントに止まる。この文字も、音〈い〉以外は普及しにくい文字の一つなのであろう。

異読はなかなかにぎやかで、中でも圧倒的なのは〈けん〉(遣)であるが、それに次いで〈き〉が多かった。これは「遺棄」の読み違いであろうが、他に〈とおい〉・〈たか〉などの読みがかなり見られたことを考え合わせると、「貴」との混同、ないし類推もありあると思われる。その他には、〈ずい〉(随)・〈ちがう〉(違)・〈かん〉(還)など字形の類似によるもの、〈せき〉〈あと〉など「遺跡」から生じたもの、〈は〉のように「派遣」から二重に誤ったものなど、さまざまなものが見られた。異読が多いのは、正読の充足率が比較的低いこととも関連があろう。高校段階で〈とむらう〉・〈つぐ〉などが見られたのは、「遺体」や「遺産」からの類推であろうか。

遣 (6)	小五人 (154)	小六人 (192)	小計人 (346)	中一人 (205)	中三人 (205)	中計人 (410)	高一人 (258)	高三人 (193)	高計人 (451)	大学人 (175)	成人人 (21)
い	77	158	235	185	194	379	245	180	425	160	17
	(50)	(82)		(90)	(95)		(95)	(93)		(91)	(81)
ゆい	3	66	69	77	43	120	63	22	85	53	8
	(2)	(34)		(38)	(21)		(24)	(11)		(30)	(38)
のこす	1	2	3	2	28	30	35	30	65	65	10
		(1)		(1)	(14)		(14)	(16)		(37)	(50)
のこる				1	2	3	4	15	19	7	2
					(1)		(2)	(8)		(4)	(10)

〈危〉

音〈き〉は、小学校段階でほぼ充足される。訓〈あぶない〉も、小学校六年

で飛躍的に伸びて、充足に近い数値を示すが、すべての段階において〈き〉には一歩及ばない。訓〈あやうい〉は、中三で顕著な伸びを示すが、以後は停滞し、成人を除けば50パーセント台にも達しない。総合して、一音一訓の典型的な文字といえよう。

小学校から高校まで、多かった異読は〈けん〉で、「危険」の覚え違いによると思われる。その他には、〈やく〉(厄)・〈おかす〉(犯)など、字形上の類似とづくものが二、三ある程度で、異読らしいものは比較的少い文字であった。

危*	小五人 (154)	小六人 (192)	小計人 (346)	中一人 (205)	中三人 (205)	中計人 (410)	高一人 (258)	高三人 (193)	高計人 (451)	大学人 (175)	成人人 (21)
き	132	183	315	195	199	394	254	190	444	175	21
	(86)	(95)		(95)	(97)		(98)	(98)		(100)	(100)
あぶない	68	171	239	157	170	327	242	157	399	143	17
	(44)	(89)		(77)	(83)		(94)	(81)		(82)	(81)
あやうい		17	17	31	79	110	72	71	143	77	15
		(9)		(15)	(39)		(28)	(36)		(44)	(71)

〈降〉

音〈こう〉は、年齢を追って段階的に伸び、高校一年で完全に充足される。訓〈ふる〉は、小学校六年で著しい増加を見せるが、以後はあまり顕著な伸びを示さず、小学校六年と中学一年で〈こう〉より優位に立つほかは、すべて〈こう〉に一歩をゆずる。訓〈おりる〉もやはり小学校六年で著しく伸びるものの、以後の伸び率は低く、高校を除いて、〈ふる〉とほぼ似た数値を示しながら推移する。この文字など、やや訓読みが弱い、一音二訓型と呼んでよいものであろう。

異読では各段階を通じて多かったのが〈りゅう〉・〈たか〉であって、これは「隆」との混同と思われる。小学校で〈りょう〉・〈みね〉が数例あったのは、「陵」との混同であろうか。中学校では〈おちる〉という記入も15例ほどあった。これら字形や字義の類似によるもののほか、〈しょう〉(昇降)・〈か〉(降

下)・くじょう) (乗降) など、熟語の記憶違いと思われるものも、小学校～高校を通じて散見した。

降*	小五人 (154)	小六人 (192)	小計人 (346)	中一人 (205)	中三人 (205)	中計人 (410)	高一 人 (258)	高三 人 (193)	高計 人 (451)	大学 人 (175)	成人 人 (21)
り う	69 (45)	106 (55)	175	128 (62)	180 (88)	308	254 (98)	191 (99)	445	174 (99)	21 (100)
ふ る	45 (29)	141 (73)	186	137 (67)	142 (69)	279	226 (88)	146 (76)	372	123 (70)	17 (81)
おりる	35 (23)	107 (56)	142	132 (64)	137 (67)	269	155 (60)	126 (65)	281	130 (74)	18 (86)
おろす		3 (2)	3	13 (6)	21 (10)	34	34 (13)	21 (11)	55	19 (11)	3 (14)
くだる*								5 (3)	5	4 (2)	

〈若〉

訓〈わかい〉は、小学校五年の段階ですでに十分に充足されると見てよい。音〈じゃく〉は、小学校段階では低いが、年齢を追って段階的に増加し、大学でほぼ充足される。両者を比べると、成人が同率であるほかは、すべての段階で〈わかい〉が優位にある。また、音〈にやく〉は〈じゃく〉とほぼ同率から出発するが、中学以後の伸び率は、〈じゃく〉に比べて鈍く、最終的にも 50 パーセント台に止まる。総体として、訓読みリードの一音一訓型といってよいだろう。

異読例は比較的少く、〈にがい〉〈くく〉〈くるしい〉など、「苦」との混同がやや目だつほかは、「諾」からの類推らしい〈だく〉、「若干」にもとづくらしい〈かん〉などが散見する程度であった。

若*	小五人 (154)	小六人 (192)	小計人 (346)	中一人 (205)	中三人 (205)	中計人 (410)	高一人 (258)	高三人 (193)	高計人 (451)	大学人 (175)	成人人 (21)
じやく	2	30	32	76	142	218	182	132	314	160	21
	(1)	(16)		(37)	(69)		(71)	(68)		(91)	(100)
にやく	3	23	26	63	80	143	117	92	209	95	11
	(2)	(12)		(30)	(39)		(45)	(48)		(54)	(52)
わかい	145	190	335	199	204	403	258	191	449	175	21
	(94)	(99)		(97)	(99)		(100)	(99)		(100)	(100)
ごとし*					1	1	1	19	20	1	2
								(10)			(10)
もし				10	10	20	14	40	58	42	6
				(5)	(5)		(5)	(21)		(24)	(29)
しく*								8	8	2	
								(4)		(1)	

4. 後期学習の10字

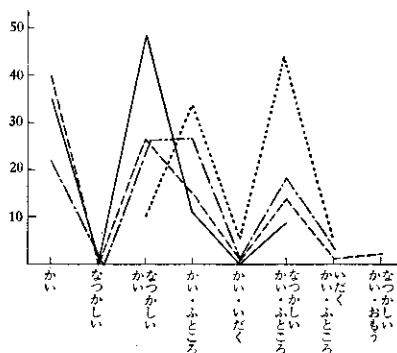
次に高校生から成人までを対象として調査した文字の中から選んだ10字について、集計結果を示す。これらは、いずれも教育漢字外の当用漢字である。

〈懷〉

音〈かい〉は、高校一年で十分に充足される。訓〈なつかしい〉は、50~40パーセント台を上下して安定しない。これに対して〈ふところ〉は、年齢を追って段階的に増加し、成人ではほぼ充足に近くなる。全体として一音半訓型ともいうべき文字である。読みの型は、〈ふところ〉の差を反映して年齢的な差がかなりはっきりしている。

異読で最も多いのは、〈こわす〉〈ほろびる〉など「壊」との混同によるものであった。その同類で〈くずれる〉は「崩壊」を、〈は〉は「破壊」をそれぞれ介した誤りであろう。その他、〈うたがう〉〈あやしい〉〈いぶかる〉など

懐	高 一 (258 人)	高 三 (193 人)	高 計 (451 人)	大 学 (175 人)	成 人 (21 人)
か い	252 (98)	189 (98)	441	173 (99)	21 (100)
なつかしい	147 (57)	82 (42)	229	79 (41)	12 (57)
ふ ところ	47 (18)	57 (29)	104	85 (49)	18 (86)
お も う*		5 (3)	5	3 (2)	
い だ く*		5 (3)	5	9 (5)	2 (10)

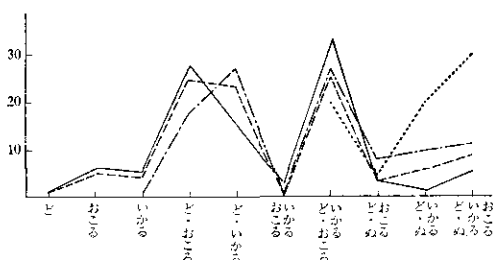


〈怒〉

は、「懷疑」に、〈のべる〉は「述懐」にそれぞれもとづくと思われる。同じく熟語起因のものに〈ちゅう〉(懐中)・〈ぎ〉(懷疑)などの例もあった。

音〈ど〉は、高校の段階でほぼ充足に近く、その後も安定した伸びを示している。表外音の〈ぬ〉は、大学と成人でそれぞれ倍増するが、最終的にも 50 パーセント台に止まる。訓〈おこる〉は、高校でかなり高い数値を示すが、そ

怒	高 一 (258人)	高 三 (193人)	高 計 (451人)	大 学 (175人)	成 人 (21人)
ど	225	173	398	172	20
	(87)	(90)		(98)	(95)
お こ る	203	128	331	111	14
	(79)	(66)		(63)	(67)
い か る	162	100	262	131	18
	(63)	(52)		(75)	(86)
ぬ*	26	31	57	50	12
	(10)	(16)		(29)	(57)



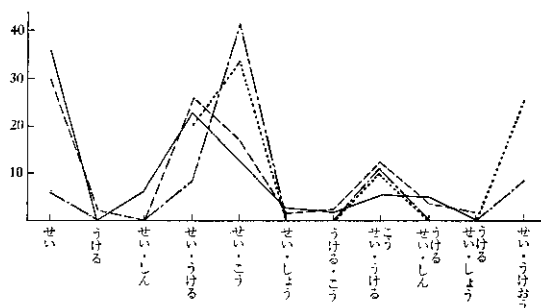
の後停滞し、〈いかる〉は、高校では〈おこる〉より低く出発するが、大学と成人とでかなり伸びて、〈おこる〉を上回る。音読みが安定しているのに対し、二つの訓読みがいずれも不安定なので、一音半訓型の一というべきであろう。読みの型も、〈ぬ〉を除けば、どの年齢段階でもほぼ同じ線をえがく。つまり、この文字の読みの発展は〈ぬ〉にカギがあるといえよう。

多い異読はやはり、〈とう〉(怒濤)・〈げき〉(激怒)・〈ふん〉(憤怒)・〈き〉(喜怒)など、熟語にもとづくものであった。他に、〈きよう〉・〈おそれ〉・〈こわい〉(恐)・〈しゅう〉(愁)・〈おん〉(怨)など、類似した文字との混同もあり、中には〈ねん〉など、「怨念」を介した二重の誤りと思われるものもあった。

〈請〉

音〈せい〉は、高校一年で完全に充足される。音〈しん〉は、数値も少い

請	高 (258人)	高 (193人)	高 (451人)	大 (175人)	成 (21人)
せ い	250	184	434	171	21
	(97)	(95)		(98)	(100)
し ん	42	15	57	2	
	(16)	(8)		(1)	
こ う	66	66	132	118	12
	(26)	(34)		(67)	(57)
う け る	102	96	198	41	6
	(40)	(50)		(23)	(29)
し ょ う*	12	7	19	11	
	(5)	(4)		(6)	



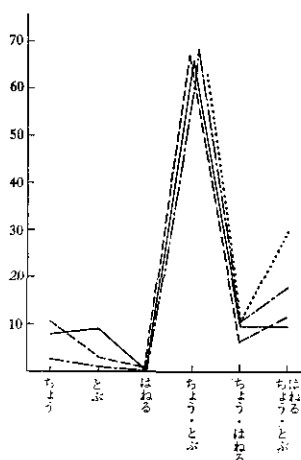
が、高校から大学へと減少する。また、表外音の〈くしょう〉は、ほとんど伸びが見られない。訓〈こう〉は、年齢を追って段階的に伸びるが、最高でも60パーセント台に止まり、〈うける〉は高校よりも大学・成人のほうが数値が低い。また、読みの型は、高校と大学・成人とで集中点がややずれるが、全体として大きな差はない。一音主導型の文字といえよう。

異読では、〈うけたまわる〉〈たまわる〉など、意味の類似の語との混同が目だつ。〈もうす〉〈おう〉〈もとめる〉〈ふ〉などは、それぞれ「申請」「請負」「請求」「普請」などの熟語の理解の不足によるものであろう。さらに、〈もうける〉〈たてる〉などは「請負」からさらに類推されたものであろうか。

〈跳〉

音くちょう〉は、高一でほぼ完全に充足されている。訓くとはねる〉は、高一で充足に近い数値を示すが、以後発展がない。訓くはねる〉は、段階的に増加するものの全体としては低い数値に止まるので、この文字は一音一訓型といつてよい。読みの型は、高校一年から成人まで非常に似た推移を示す典型的な例である。

跳	高 一 (258人)	高 三 (193人)	高 計 (451人)	大 学 (175人)	成 人 (21人)
ち ょ う	235	182	417	173	21
	(91)	(94)		(99)	(100)
と ぶ	219	157	376	152	19
	(85)	(81)		(87)	(90)
は ね る	50	36	86	49	8
	(19)	(19)		(28)	(38)

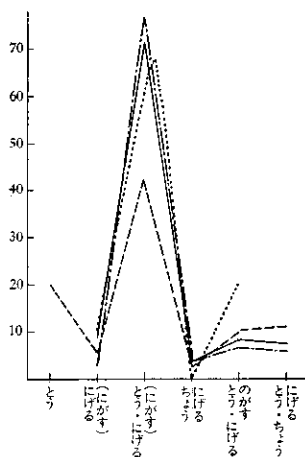


くとう・にげる〉(逃)くいどむ〉(挑)くながめる〉(眺)や、くける〉(蹴)くおどる〉(躍)など、字形の類似にひかれた異読が多く、熟語起因と思われるものは、くやく〉(跳躍)・くはば〉(幅跳)ぐらいであった。

〈逃〉

音くとう〉と訓くにげる〉は、高校一年でほぼ完全に充足されている。これ

逃	高 一 (258 人)	高 三 (193 人)	高 計 (451 人)	大 学 (175 人)	成 人 (21 人)
と う	232	172	400	165	19
	(90)	(89)		(94)	(90)
に げ る	257	193	450	171	21
	(99)	(100)		(98)	(100)
に が す	63	26	89	31	5
	(24)	(13)		(18)	(24)
の が れ る	15	24	39	18	4
	(6)	(12)		(10)	(19)
の が す	18	8	26	10	2
	(7)	(4)		(6)	(10)
ち ょ う*	26	33	59	17	
	(10)	(17)		(10)	



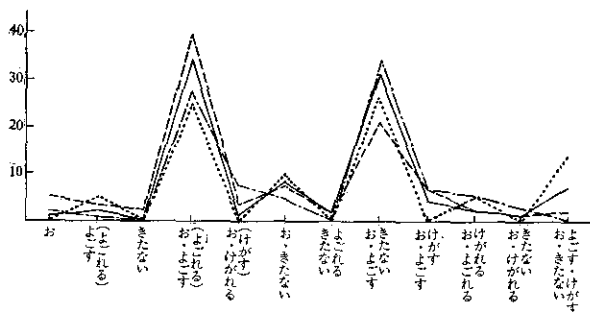
に対し、訓〈のがれる〉は〈のがす〉を加算しても10~20パーセント台に止まり、年齢的な伸びもはかばかしくない。表外音のくちょうも高校と大学で大きな差はなく、全体としては、典型的な一音一訓の文字で、しかも年齢的な発展が非常に少ない例である。読みの型もそれを反映して、ほとんどがくとう・にげる(にがす)の一個所に集中している。

異読は一般に少ないが、中で多かったのが熟語起因と思われるくひ(逃避)である。他には、くつい(追)くこえる(越)など類似の字形に起因するものが二、三見られる程度であった。

〈汚〉

音〈お〉は、高校一年で十分に充足される。〈きたない〉〈よごれる〉〈よごす〉などの訓は、ほぼ30~50パーセント台で推移し、きわだった伸びを示さない。〈けがれる〉〈けがす〉なども、同じく10~20パーセント台を上下して

汚	高 一 (258人)	高 三 (193人)	高 計 (451人)	大 学 (175人)	成 人 (21人)
お	238	176	414	167	20
	(92)	(91)		(95)	(95)
きたない	132	72	204	84	12
	(51)	(37)		(48)	(57)
よごれる	156	89	245	82	7
	(60)	(46)		(47)	(33)
よごす	103	83	186	74	10
	(40)	(43)		(42)	(48)
けがれる	33	18	61	29	6
	(13)	(10)		(17)	(29)
けがす	26	21	47	35	2
	(10)	(11)		(20)	(10)



顕著な発展は見られない。一音主導型の文字で、安定した訓がない。読みの型は、〈お・よごす〉と〈お・よごす・きたない〉との二個所にどの年齢段階でも山がきていて、見るべき変化発展がない。

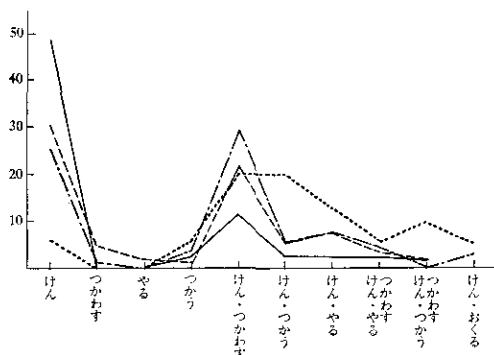
異読で多かったのは、〈だく〉で、「汚濁」に起因すると思われる。〈にごす〉も同根であろう。その他〈くしょく〉(汚職)・〈くせん〉(汚染)なども同じく熟語に起因するものであろう。字形や意味の類似によるとと思われるものは〈くちる〉(朽)・〈くどろ〉(泥)など二、三に止まる。

〈遣〉

音〈けん〉は、年齢を追って漸増はするものの、完全充足には至らない。その原因の一つに「遣」との読み違いの多いこともあげられよう。訓〈つかわす〉は、高校三年で倍増し、その後も漸増するが、音読みの半分に止まる。〈つかう〉〈やる〉などの訓読みに至ってはさらに少く、成人を除けばせいぜい10パーセント台である。この文字も全体としては一音主導型といえよう。読みの型はかなり多くの型に分れて、しかも、年齢によってかなり違った線をえがいているのは、充足した訓読みがないことを反映しているのであろう。

異読で圧倒的なのは、「遣」と混同した〈い〉〈のこす〉〈くゆい〉などの読みである。字形の類似では〈ずい〉(随)も高校・大学を通じて見られた。また、熟語の理解不足に起因すると思われるのは、〈は〉(派遣)・〈とう〉(遣唐使?)など。〈き〉(遣棄)などは、二重の誤りによるものであろう。

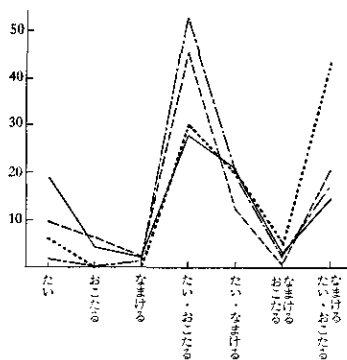
遣	高 一 (258人)	高 三 (193人)	高 計 (451人)	大 学 (175人)	成 人 (21人)
け ん	172	132	304	129	17
	(67)	(68)		(74)	(81)
つ か わ す	35	57	92	64	8
	(14)	(30)		(37)	(38)
つ か う	8	11	19	19	8
	(3)	(6)		(11)	(38)
や る*	10	25	35	25	5
	(4)	(13)		(14)	(24)



〈意〉

音〈たい〉は、高校から大学へかけて漸増し、大学でほぼ充足される。訓〈おこたる〉は、高三で激増するが、以後あまり伸びず充足には達しない。訓

意	高 一 (258人)	高 三 (193人)	高 計 (451人)	大 学 (175人)	成 人 (21人)
た い	207	167	374	159	20
	(80)	(87)		(91)	(95)
お こ た る	124	138	262	134	16
	(48)	(72)		(77)	(76)
な ま け る	104	66	170	69	14
	(40)	(34)		(39)	(67)



〈なまける〉は、〈おこたる〉の半分ぐらゐの数値で、高校から大学まで同じぐらゐのレベルに推移する。読みの型は、成人を別にして、〈たい・おこたる〉に集中していて、その点からも一音一訓の文字といえよう。高校三年と大学は似たカーブをえがき、高校一年は〈おこたる〉が少いため、成人は〈なまける〉が多いために、それぞれやや違った分布を示す。

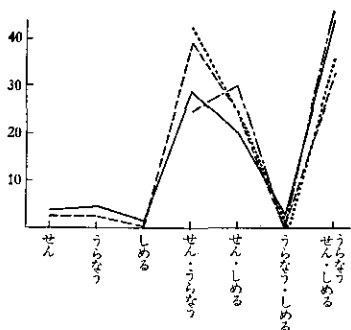
異読では、最も多かったのが〈くだ〉で、これは「怠惰」にもとづくものであろう。同じく熟語に起因するものに〈まん〉(怠慢)もあった。その他、〈のろい〉〈おろか〉〈おとろ〉など、類似の意味の語にとり違えたものも散見する。〈とどこおる〉〈おとろえる〉などは、「滞」「退」などの同音の文字にからむものであるうか。

〈占〉

音〈せん〉は、高校一年でほぼ十分に充足され、訓〈うらなう〉は、高校一年から成人まで70パーセント台を上下して、発展がない。また、訓〈しめる〉も50~70パーセントを上下して安定しない。読みの型としては、どの年齢も〈せん・うらなう〉と〈せん・しめる・うらなう〉の二個所に集中しており、一音一訓と一音二訓との中間型といえる。

〈よる〉〈きょ〉〈くりよう〉など、「占拠」「占領」などの熟語にもとづく異読

占	高 一 (258人)	高 三 (193人)	高 計 (451人)	大 学 (175人)	成 人 (21人)
せ ん	236	193	429	173	21
	(91)	(100)		(99)	(100)
う ら な う	199	144	343	122	16
	(77)	(75)		(70)	(76)
し め る	165	114	279	130	12
	(64)	(59)		(74)	(57)

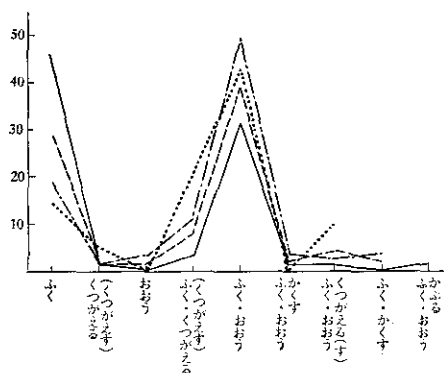


が散見した。〈えき〉(易)とあるのは、意味上の混同であろう。他に、〈しめす〉〈しまる〉などがあったのは、〈しめる〉の意味のとり違いから生じた類推であろうか。

〈履〉

音くふくは、高校ですでに充足に近く、大学でほぼ完全充足に達する。これに対して、訓は、くおおうが段階的に増大するが、それも充足には程遠い数値に止まる。その他、くくつがえすくくつがえるなどの訓も段階的に増加するが、10パーセント台に止まる。音読み主導型といえよう。読みの型は、年

履	高 一 (258人)	高 三 (193人)	高 計 (451人)	大 学 (175人)	成 人 (21人)
ふ く	218 (84)	167 (81)	385	160 (91)	20 (95)
お お う	87 (34)	91 (47)	178	103 (59)	13 (62)
く つ が え す	10 (4)	19 (10)	29	28 (16)	4 (19)
く つ が え る	6 (2)	10 (5)	16	7 (4)	2 (10)
か く す*	3 (1)	7 (4)	10	11 (6)	
か ぶ る*	5 (2)	3 (2)	8		



齢的な伸びを反映して、集中個所はほぼ同じでも、それぞれやや違った線をえがいている。

異読の中で最も多かったのはくく(履)であったが、他にもくはくくくつなどこの文字と混同した誤りが多く、中には「履歴」を介してくれきと読むという、二重の誤りも見られた。その他は、くはん(反覆)くひ(被覆)

など熟語に起因するものが二、三あった程度である。

5. 総合的な考察

以上、個々の文字についてそれぞれ考察を加えてきたが、これらを総合すると次のようなことが言えるであろう。

- 1) 全般的に見て、漢字の読みが変化し、多様化するの、小学校六年生と中学三年生とに著しいように思われる。三年ないし四年生に配当されている漢字についても、五年生と六年生とでかなり歴然たる差があるのは、六年生の時期が漢字に対する興味も強く、学習意欲も旺盛なためであろうか。個々の読みでは、「冷」のくひやす、「省」のくせい、「値」のくあたひ、「重」のくちょうなどの読みにその傾向が顕著であった。一方、高等学校から大学にかけては、漢字の読みはあまり進展せず変化も少い。むしろ、大学生と成人との差のほうが目立つ。代表的な音訓はともかく、第二、第三の読みになると、成人のほうがはるかに高い数値を示しているのであって、成人は、高校生や大学生に比べて、漢字を幅広く多様に読んでいるといえそうである。逆にいえば、今の若い者は、漢字の知識が狭いということになるのか。
- 2) 初期学習の10字のうち、代表的な音読みが訓読みより先に充足されるのは、「後」くご、「幸」くこう、「表」くひょうの3字、代表的な訓読みが音読みに先行するのは、「形」くかたち、「負」くまける、「間」くあいだ、「細」くほそいの4字であり、代表的な音読みと訓読みとがほぼ同時期に充足されるのは、「歩」くほ・あるく、「重」くじゅう・おもひ、「通」くつう・とおるの3字であった。
- 3) 中期学習の20字のうち、訓読みが音読みより早く充足されるのは、「若」くわかいと、「値」くあたひの2字、音読みと訓読みの代表的なものがほぼ拮抗して表れるのは、「結」くけつ・むすぶ、「過」くか・すぎるの2字で、他の文字はすべて代表的な音読みが訓読みよりも早く充足される。
- 4) 後期学習の10字のうち、代表的な音読みと訓読みとが高校の段階で優劣なく充足されるのは、「逃」くとう・にげるの1字だけで、他の漢字はすべて音読みが訓読みより早期に充足され、充足率も高い。

以上の2)~4)のことから、小学校中学年ごろまでに習得するはずの漢字を除けば、一般に当用漢字においても、音読みに比べて訓読みの充足するのは遅く、充足率も低いといえそうである。そして、そのことは、漢字の音符化の進行を示す一つの徴候と見ることができるかもしれない。また、それは、一部の

基礎的な文字は別としても、漢字が一般に音読みの形、または熟語の形で習得され、使用されることが多いのを示すのではあるまいか。

5) 異読の中には、前後に配列された文字を誤って読んだと思われるものや、なぜそのような読みが可能なのか見当のつかないものもあったが、それらを除いて、原因のほぼ突きとめられるものは、次のように分類できるであろう。

- ① 意味内容の類似した文字の読みと結びつけたもの…「冷」のくさむい・すずしい>;「省」のくのぞく・けずる>;「重」のくはかる>;「通」のくつづく>;「幸」のくきち>など。
- ② 字形の類似した文字と混同したと思われるもの…「後」のくとし>;「幸」のくからい・さい>;「懷」のくこわす>;「省」のくすずめ>;「値」のくうえる>など。
- ③ 熟語の記憶のあいまいさに起因すると思われるもの…「冷」のくとう>;「省」のくはん・りゃく>;「値」のくか・だん>;「通」のくこう>;「重」のくけい・りょう>;「負」のくしょう・かち>;「幸」のくふく>など。
- ④ 異読の原因が重複しているもの…「怒」のくねん>(怨念?);「値」のくくらい>(位置?);「幸」のくあまい>(甘辛?);「懷」のくは>(破壊)など。
- ⑤ 類推による異読を思われるもの…「遺」のくたか>(貴?)など。

これらの異読のうち、④や⑤の仲間はそう多くはない。また、どの異読が多いかは、文字によっても違うが、一般に、初期学習の10字に多かったのが、意味・内容の混同や類形字との取り違えであり、後期学習の10字に目だったのが、熟語の記憶違いに起因するらしいものである。このことは、これらの文字において、音読みが訓読みに比べて優位に立っていることと無関係ではあるまい。すなわち、ここにもまた漢字の音符化の傾向を読みとることができそうである。

6. おわりに

一般に現代の日本人、特に若い人たちにおいて、漢字はその一つ一つが独立した語であるよりも、一つの音符であり、造語成分であるとして認識される傾向が強い、といわれる。つまり、「跳」なり「躍」なりがそれぞれどう読まれ、どういう意味をになっているか、ということを知るよりも、「跳躍」という一語として読まれ、意味内容がとらえられている、というのが実状ではあるまいか。「勝」がくショウ>でありくかつ>である、「負」がくフ>でありくまけ

る〉であるよりも前に、「勝負」が〈ショウブ〉であり、〈かちまけ〉なのであろう。

従って、この調査のように、単独の漢字を並べておいてその読みを書けと要求されるのは、被験者にとって対応しにくい調査だとも考えられる。生活体験に即して調査をするのなら、「跳躍」や「勝負」などの形か、「躍る」「勝つ」などのように語として呈示してもらったほうが答えやすい、ということもある。従って、例えば今回の調査で「形」に〈ぎよう〉という読みを記入しなかった児童でも、「人形」という語で示されれば、〈にんぎよう〉と答えたかもしれない。そもそも、われわれが文字を正しく読み、理解することを求められるのは、その文字が単語や文の表現要素として用いられているときであって、それ以外ではない。とするならば、その使用場面から文字を切り離したような形での、このような調査は、文字そのものの読みの能力を測定する方法としても果して有効であるか、という疑問は当然成り立つ。そういう欠点のあることを承知のうえであえてこのような方法をとったのは、あくまでも読みの変化や多様化の過程を見ようとすることに主要な目的があったからであり、前述のように、熟語や文中語句の形で提示することで生ずる予見性や示唆性をできるだけ避けたかったためである。

方法上の問題としてはまた、次のようなことも考えられる。われわれが漢字を見た場合に、音読みと訓読みのどちらを先に思い浮かべるか、ということは、個人差もありまた漢字によって違おうだろうが、一般的には、一字で示された場合、まず訓読みを思い浮かべることが多いのではあるまいか。われわれならば、例えば「続」「遊」は〈ゾク〉〈ユウ〉と読むよりも先に〈つづく〉〈あそぶ〉と読みそうである。ということは、この調査のように漢字が孤立して示された場合は、熟語などの形で提示された場合に比べて、訓読みのほうが音読みよりも有利だということにもなる。それにもかかわらず、一般に音読みのほうが訓読みより早期に高率の充足を示すということは、児童・生徒ないし学生の間で漢字の音符化がかなり進んでいることを示すものと考えてよいであろう。

漢字の音符化が進むということは、これを裏返せば漢字の意字としての機能が低下することでもある。それは漢字の造語力の衰弱という現象にも結びつく。江戸時代末期から明治時代へかけてわが国では、外国語の盛んな流入に対応し、それらの訳語として実に多数の漢語が作られているが、その大部分は、いわば一種の会意法によるものであった。「鉄」で作られた「道」であるから「鉄道」なのであり、電気による通信であるから「電信」というわけである。

こういう造語法は、漢字の一つ一つが意字として機能してこそ可能なのである。ところが、最近のように漢字の意字としての機能が衰えてくると、こういう会意による造語法はその力を失う。近年わが国に流入した外国語はほとんど漢語に翻訳されることなく、原語の形のまま片仮名書きで通用している。その原因には、いろいろ挙げられるが、漢字や漢語の造語力の低下ということもその有力な一因に数えてよいであろう。

造語力の問題は、外国語の翻訳に限ったことではない。われわれの生活の中で新たに作りだされる言葉についても同様なことは言えそうである。一般に、日本語の語彙組織の中において、漢字や漢語は、抽象的、思弁的な概念を表出するのに多く用いられ、具体的、感覚的なものごとを表すことは比較的少い、といわれている。ところが、近年生活の中に新しく登場する言葉は、具体的、感覚的なものが多い。そのためか、漢字、漢語による造語は、「国民榮譽賞」のような権威主義的なもの、「交通遺児育英会」のような組織名、または、「公害」「大気汚染」「自然破壊」のような新聞造語を別にすれば、一般に減少していると思われる。経済用語でさえも、「円高」「黒字減らし」のような和語臭の強い造語が最近は多いようである。

そのような漢字、漢語の地盤沈下は、漢字の多様な訓読みが忘れられていくことや、意字としての機能が衰えていくことと決して無関係ではあるまい。特に若い人たちに見られる漢字の意味離れや読みの単一化の傾向は、このささやかな調査研究を通してはかなりはっきりとうかがわれることである。そのことのよしあしは別として、少なくともそういう傾向のあることは、今後の日本の国語政策や国語教育を考える上に見のがせない因子としてこれまで以上に重視される必要があるように思われるのである。

この調査研究に当って協力していただいた学校は下記の諸校である。

川崎区立東柿生小学校；神戸市立西舞子小学校；筑波大学付属小学校
 和光市立第二中学校；神戸市立舞子中学校；筑波大学付属駒場中学校；筑波大学
 属中学校

東京都立井草高等学校；東京都立光が丘高等学校；東京都立紅葉川高等学校；筑波
 大学付属高等学校

筑波大学〈社会〉〈自然〉〈人間〉の各学類

朝日カルチャセンター日本語講座(成人)

貴重な時間を割いて調査に当ってくださった先生方、および児童・生徒・学生の諸君にあつくお礼を申しあげたい。また、本学の林四郎教授、芳賀純教授には、手厚い御指導と御協力をいただいた。衷心から感謝申しあげる次第である。